

開催地名：愛知県田原市	
開催日時	令和元年12月7日（土） 19:05～20:30
開催場所	赤羽根文化会館
語り部	高橋 進一 （千葉県旭市）
参加者	自主防災会・市職員（避難所担当職員）約100名
開催経緯	<p>住民の防災意識の低下が懸念される中で、市域の三分の一が津波の浸水区域となっているものの、津波の怖さをあまり認識できていないことも指摘されている。今回、東日本大震災の語り部からお話を伺い、防災に対する意識の向上と、また、自主防災会が主体となった避難所運営訓練を実施する地区に対し、実際の被災経験に基づく避難所運営に必要な事項についてのアドバイスをいただきたい。</p>
内容	<p>（1）千葉県旭市の被害状況</p> <p>旭市の広い範囲が震度5強の強震に襲われ、その後、沿岸部を大津波がくり返し襲った。地震発生からおよそ2時間半後、最大の津波が押し寄せた。災害波は堤防を越え、町を大きく飲み込んでいった。沿岸部では家屋が流出したり、押し流された車や家財道具により、がれきの山ができた。津波被害の大きさをうかがい知ることができる。</p> <p>地震発生から津波の被害を受けた旭市では、多くの人たちが一時避難所に避難した。停電、断水の続く中、収まらない余震の不安と寒さに耐え、眠れない一夜を過ごした。津波以外にも地震による被害が多く発生した。道路の陥没や地割れ等も至る所で発生した。家屋は傾き、ひび割れ等の住宅被害も多数見られた。海上地域にある普門院では灯籠が倒れたり、屋根の瓦が落ちた。</p> <p>今回の震災では、液状化でも大きな被害が出た。地盤が一旦、液状化したところでは、二次災害の恐れが大きいと言われている。旭市の被害状況は死者14名、行方不明者2名。住宅被害は3,827世帯に及んだ。住宅被害のうち床上浸水が677世帯、床下浸水276世帯、液状化768世帯、特に被害の多かった飯岡地域では、この他、津波による建物の倒壊等で数箇所の道路が通行不能となった。東端にある飯岡漁港にも津波が押し寄せ、漁船が転覆する等、甚大な被害をもたらした。また、文化財にも多大な被害を与えた。</p> <p>（2）復興に向けて</p> <p>これまでにさまざまな復興プロジェクトも行われている。昨夏行なわれた『いいおか津波を学ぼう、親子防災教室』では、被災した地域を実際に見て回り、津波の恐ろしさ等を学ぶ防災教室が開かれた。また、10月に県が実施した県民アンケート結果では、地震発生後すぐ津波が来ると思った人はわずか22.7パーセントであった。77.3パーセントは地震イコール津波という認識を持っておらず、</p>

海岸近くの住民でも、すぐに高台に避難という意識が希薄だったことが分かった。一度避難してから津波が完全に収まるまでの間に自宅に帰った人は37.1パーセントで、家や家族が心配で車や貴重品を取りに行ったことが帰宅の主な理由であった。町にはまだ大震災の傷跡が残るが、市民の暮らしが1日でも早く戻るよう、復興に向け、町は着実に歩みを進めている。

(3) 災害を振り返って

一つ大事なことは、過去の災害から学ぶということである。私の住む千葉県の旭市でも、こちらの田原市でも、過去に起こった災害について、今一度見直してみることが大切であると思う。自分の住む街がどのような地形なのか、活断層はあるのか等、土地の特性を認識しておくことをおすすめする。

また、防災対策上重要な備蓄として、家族全員分の水の確保をお願いしたい。一人当たり2リットルのミネラルウォーターを常に保管してほしい。水が一番大切である。

続いておすすめしたいことは、家族で防災についての話し合いをしていただき、避難場所や携帯電話不通時の相互の連絡方法などについて確認をしておくことである。そして最も重要なことは、自分の命は自分で守るということである。命を守ることはすべてに優先する。自分が負傷したり、命を落としたら、家族や友人を誰も助けることができない。そのため、不用意に危ない行動をとらないでほしい。そして安全を確認してから、救助に向かっていただきたい。



開催地より

貴重なご経験を具体的にお話いただき、本当に引き込まれた。今後の益田市の防災に対して、あるいは、地域防災活動の推進につなげるための一助としていきたいと強く感じている。